菅久尚武 先輩を偲ぶ

ガネフォ水球
古川 康之
中央大学出身

「ガネフォ会」も、早いものであれから60年を経過しました。
すでに菅久尚武(享年74歳)、田中信義(享年51歳)、浜野武人(享年67歳)、房野康滋(享年79歳)の4名の方々が帰らぬ人となっておられます。この意義ある節目の年を一緒に迎えられなかった事が、残念で残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

私と菅久先輩との出会いは、昭和26年(1951年)広島市、修道学園(中高一貫、私立の男子校)の水泳部からです。

先輩は中学2年生ながら、当時、全国中学生競泳(短距離)のランキングでベスト3の選手で雲の上の存在で皆の憧れでした。

修道学園は歴史が古く、ルーツは広島浅野藩の藩校です。
原爆の爆心地から南に約3kmの所に在り、木造の校舎でした。
生徒数は、1クラス60名で6組あり、中1から高3まで同じ構成で合計2,160名、キャンパスも一緒の学び舎でした。

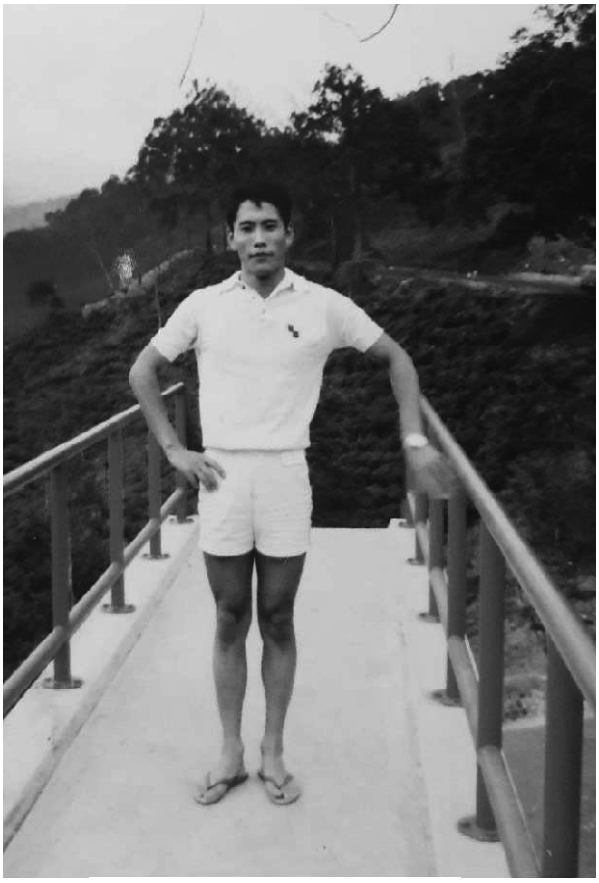
校是は「質実剛健」。運動会や文化祭等学園の大きな行事は、中学、高校の合同開催でした。男子校でしたので、豪放快活、質実、素朴な生徒が多く、そんな校風の学園でした。

先輩は、名前の通り尚武(武道を大切にする)の気風があり、愛国心が強く(お父様は空軍将校で、そのDNA?)郷土愛、母校愛は人一倍で修道

の6年間の学園生活でその気質が一層培われたのでしょう。

修道水泳史によれば、水泳部も歴史が古く、大正4年(1915)創部。
大正8年(1919)から昭和12年(1937)広島県及び近県のすべての大会で優勝。
大正14年(1925)の第7回極東大会や昭和7年(1932)の五輪ロスアンジェルス大会には修道OBが大活躍。昭和7～8年(1932～3)の全国中等大会で連続優勝。修道は水泳でも伝統校だったのです。

水泳部の練習は中学高校一緒でした。先輩は速かったのでいつも高校生と練習、私は初心者で、いつもプールの隅っこで基礎練習ばかりでした。
そんな時も、先輩は何かと声をかけてくれて、優しく頼れる人だと強く印象に残っています。2年生になってやっと皆と練習が出来るようになって嬉しかった事、そして試合に出場できて先輩が一番喜んでくれた事、忘れることができません。


菅久先輩

当時の修道の水泳は、昔の面影は無く、沈滞していた時期で、先輩一人が輝いていました。
先輩の影響で、次第に修道も力をつけて中学の大会では広島地区でトップクラスになり、先輩に憧れて修道高校に入学する選手も居り、高校の大会では、中国地区で(広島、山口、岡山、島根、鳥取)トップになりました。

＊初めての遠征の想い出

先輩との一番の想い出は、インターハイ（全国高校選手権大会）への出場権を広島県大会で獲得できて、二人(先輩３年生・私２年生)で東京へ遠征したことです。当時は、旅館に泊まるには、米を持参した時代です。汽車は蒸気機関車で広島～東京間は14～5時間かかりました。広島を夕方発の夜行列車で出て翌朝東京着、二人共、初めての大都会・東京で右も左も分からず、旅館と試合会場を行き来するのがやっとで、試合どころではなく、惨敗して帰って来ました。しかし後から思うとあの時の辛苦が、楽しさに変わって、良い経験と想い出になっております。

＊水球の思い出

修道の水球は、私が高校1年の時から始まりました。

昭和29年(1954)の奈良国体(国民体育大会)で高校水球が行われる事となり(当初はオープン競技、昭和33年から正式種目となった)水泳部長の種田先生が「我が修道も水球で国体に参加するぞ！」と英断されました。

皆は、やっと自分の泳ぎに自信がつき、試合でそこそこの結果を出せるようになり,「今更水球？」という思いが強く、内心二の足を踏んでいました。

この時も先輩は2年生ながらも、「皆で国体に行くぞ！」とリーダーシップを発揮し、皆を叱咤激励(しったげきれい)された姿を思い出します。(この年から修道は競泳・水球の二刀流になりました）おかげで広島県選手権1位になり奈良国体に参加しましたが残念ながら1回戦で敗退しました。

翌年の神奈川国体も1回戦で敗退、次の兵庫国体も1回戦で敗退でした。

水球の歴史も浅く、練習方法等を良く理解せず、ただ泳力だけはどこにも負けないという自負だけでは、通用しませんでした。その後、種田先生は、外部からコーチを招へいし、昭和４４年 (１９６９)インターハイ初優勝、国体も優勝、翌年にもインターハイ、国体共に2連勝を果たしました。

先輩と皆であの時植えた水球の種が１８年後に見事な華を咲かせました。

あの時、水球を始めて良かったと皆誇りにしております。

＊神奈川国体のエピソード

先輩がキャプテンの時のエピソードを「修道水泳史」に５５歳の時に寄稿され、次の様に書き綴っておられます。(抜粋です)

「高３の神奈川国体の帰途、選手たちの衆議一決で広島迄の急行券を払い戻して熱海に一泊することになった。海岸の一流（に見えた）旅館と交渉、４５０円。それでも鯵であったが尾頭つきの料理がでた。夕食後は湯の街熱海を浴衣でキョロキョロ、遊郭街までも見学した。熱海から広島迄は当然鈍行列車であり、広島まで丸一日の食費としてマネージャーから一人当たり１５０円が支給された。・・中略・・こんな事をしていたので、学校に出たのは予定より3日後であった。引率の種田先生は教頭にだいぶしぼられたようだが、我々にはなにも言わなかった。古き良き時代の話である」と。

先輩が種田先生に皆の願望を熱く訴え、その熱意に先生もしぶしぶ了解されたもの。「さすがキャプテン凄い！ やった～！ バンザ～イ！」と皆で歓声をあげ喜んだことが忘れられません。男気の強い頼れる先輩でした。

＊昭和３２年(１９５７)４月　中央大学に入学。

きっかけは、先輩から中央大学で「水球を一緒にやろう」と誘いがありまし

た。国体で3年連続1回戦敗退、そんな自分が果たして大学で通用するのか？ 悩みましたが、先輩が「お前なら大丈夫だ！ 一緒に日本一になろう！」とおだてられ中大へ水球選手として半ば推薦の形で入学しました。

中大の水泳部は、その歴史も浅く大学側がスポーツ活動に力を入れ、高校の将来性のあるスポーツ選手を大学に誘致していた時代でした。数年前から選手勧誘に力を入れ、高校生の第一線級の選手が入学し、すでに水泳でもオリンピック代表選手を輩出し、常勝日大に迫る勢いでしたが、競泳、水球共にいつも日大の後塵を拝し第2位でした。

当時の中大水泳部は、競泳、水球、飛込み(昭和32年結成)の3種目があり、部員は約80名（競泳約50名、水球約20名　飛込み3名)でした。

水泳部の伝統で2年生までは、当番制度があり合宿所の廊下とトイレ掃除、そして約60人分の3食の炊事とその食材の買い出し、3～4人が1組で7～10日毎に当番が回ってきました。

田舎から出てきて初めての集団生活、しかも体育会独特の縦社会、戸惑うことばかり、特に当番の時は失敗ばかりで先輩からどやされてばかり、そんな時も、先輩は陰で私のことを庇(かばって)ってくれていました。どんなに心強かった事か忘れる事はできません。

試合が近くなると、試合の10日前から正選手は特典で当番を外されて練習に専念出来ました。当番の抜けた人員は3～4年生でも補欠選手が補充されて当番に当たる。縦社会の運動部では、下級生の当番を上級生が代わってやらされる事は屈辱以外の何ものでもありませんでした。

この屈辱だけは絶対受けないぞ!！ 正選手に成るぞ!と心に強く誓った事を覚えています。

念願かなって3年生で正選手に成り、その初戦が第1回末広杯日本室内水上選手権でした。決勝戦で前年のアジア大会で優勝した日本代表チ

ームと戦い接戦の末勝利し日本一になりました(先輩はライトバック、私はハーフバック)。先輩と高校から水球を始め、日本一になれた喜びを分かちあった事、大学での一番の想い出です。先輩に誘われて中大に進学したからこそ叶えられた夢、ありがとうございました。

私は、昭和36年に大学を卒業後、サラリーマン生活を送っておりました。
先輩とは、お互い別々の生き方をしていましたので、OB会や母校の応援等で会う程度でした。
昭和38年、そんなある日、先輩から「ガネフォに参加するからお前も来い」との誘いがあり、二つ返事で「お願いします」と答えたものの、2～3日経ってガネフォの事情を理解して、悩みに悩みました。
翌年にアジア初の東京オリンピック開催を控え、日本体育協会、日本水泳連盟、そしてマスコミも大反対、世論も批判的、そして会社はガネフォ参加を許可してくれるのか？ 等々・・・・。
しかし、先輩は「我々は、インドネシアとの架け橋になるのだ！」と想いを熱く語られ、「古川！俺に就いて来い！ 一緒に行こう！」と説得され、その熱情に決意を新たにしました。
今、振り返ってみると「ガネフォ」は私の人生の原点の一つになりました。
先輩とは、中学で出会い、高校で水球を始め、大学で日本一に、そしてガネフォへの参加、自分の人生の節目、節目で先輩から誘われ、それが私にとって全て素晴らしい結果に繋がっております。
先輩に感謝、感謝の想いばかりです。

先輩が59歳(1996年、平成8年)の時、修道の同窓会誌に寄稿された文章の中でガネフォに参加した時の心情を書かれております。(抜粋です)

【若かった。情熱があった。血が騒ぐ。捨石になり架け橋となろうと全員が思った。国家の危機に青年が立ち向かう幕末の志士になった気持であったように記憶する。】・・中略・・【私にとって「あのとき」は今も生き続けているのである】と、綴っておられます。

先輩は、名前の通り尚武な人でした。

きっと、鬼籍に入られた今でも「あのとき」が生き続けている事でしょう。

心よりご冥福をお祈りいたします。

真に、真にありがとうございました。

先輩の声が聞こえてきそうです。

「古川！ 早くこっちへ来い！」

先輩！ 申し訳ありません。こればっかりはマイペースで生かせ下さい。

合掌

菅久先輩（右）と私（左）